

シャイネスが高い人における SNS 利用場面・現実場面の自己開示と孤独感の関係

問題と目的

コロナ禍以降の日本では、人びとの感じる「孤独」が広く問題視されるようになり、孤独感を軽減する要因の解明がますます求められてきている。そのため本研究では、新しい関係を構築しにくく、孤独感を感じやすいシャイな人の孤独感の軽減に着目した。シャイな人は自己開示が少ない傾向があり、孤独感を持ちやすいと考えられる。一方で、現代では SNS の普及により、非対面でのコミュニケーションが一般化し、匿名でのやりとりも行われるようになった。このような自己の匿名性が担保された環境であれば、シャイであっても自己開示がしやすくなると考えた。

そこで本研究では、SNS の利用実態を明らかにすることに加え、シャイネスが現実場面・SNS 場面上での自己開示にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすること、シャイな人の現実場面・SNS 場面での自己開示が孤独感にどのように影響しているのかを明らかにすることを目的とした。

方法

大学 1 年生から大学 4 年生までの計 118 名（男性 34 名、女性 84 名）を対象に、Google フォームを用いて無記名のアンケート調査を行った。SNS の利用実態として、SNS の利用経験の有無、SNS 上で、匿名で知り合った人の有無、SNS 上で、匿名で知り合った人との交流頻度、利用している SNS の種類の回答を求めた。また、シャイネスの程度を測定する尺度として相川（1991）特性シャイネス尺度、孤独感を測定する尺度として諸井（1985）が作成した改訂 UCLA 孤独感尺度を使用した。さらに、現実場面と SNS 場面での自己開示の程度を測定するため、丹羽・丸野（2010）が作成した自己開示尺度を用い、各場面を想定した回答を求めた。

結果と考察

仮説として第 1 に SNS 上での匿名の交流がある群のほうが、匿名の交流がない群に比べ、匿名性のより高い SNS が好まれる（仮説 1）；第 2 に、特性シャイネス得点高群は低群に比べ、現実場面よりも、匿名性が担保された SNS 場面の方で、自己開示量得点が高い（仮説 2）；第 3 に、特性シャイネス得点が高群であっても SNS 上での自己開示量得点が高いほど、孤独感得点が低くなる（仮説 3）；の 3 点をそれぞれ設定した。

分析の結果、匿名の交流がある場合は匿名性の高い X が好まれ、匿名の交流がない場合は匿名性の低い Instagram が好まれる傾向があったことから、仮説 1 は支持された。一方で、シャイネスの程度の関わらず現実場面の方が SNS 場面よりも自己開示量が多く、シャイな人にとって現実場面での浅い内容の自己開示は、孤独を緩和する役割があることが明らかになった。このことから、仮説 2、3 は支持されず、SNS を利用する目的や用途によって自己開示の必要性が少ない場合や、自己開示による情報流出を危惧した場合の自己開示量への影響についての検討が必要であると考えられた。

物語読書への没入体験が読後の思考と行動に及ぼす影響

問題・目的

物語は身近な娯楽であると同時に、登場人物の経験や選択を通じて、教訓や価値観が伝えられ、私たちの感情や行動に多様な影響を及ぼす文化的資源でもある。

本研究では、物語読書が読者に与える影響を「行動(現実生活での具体的な変化)」と「思考(価値観・態度の変容)」の2側面から捉え、物語への没入体験が現実の思考や行動にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。加えて、予備調査の結果をもとに新規尺度「読後の影響」を作成し、物語が読者に与える影響について探索的に検討する。

方法

本研究は予備調査と本調査の2つの調査が行われた。予備調査では18名、本調査では172名の大学生を対象に、質問紙調査を実施した。物語体験を想起しやすくするため、調査の冒頭において自由記述課題を設けた。本調査では、物語への没入を測定するLRQ-Jと新たに作成した読後の影響尺度を用いた。

結果・考察

予備調査では、物語が読者に与える影響として、「行動への影響」「思考・価値観の変化」「感情の変化」「進路・将来への影響」「空想・想像」の5つのキーワードが見られた。本調査では、「読後の影響」を「思考・感情」「憧れ・理想」「実生活への影響」「対人・自己変容」のカテゴリーに整理された。

相関分析の結果、物語への没入度は読後の影響と正の関連を示した。特に没頭因子はすべての側面に広く寄与していた。一方、共感・イメージ因子は思考・感情など心理的側面に限定的な関連を示した。これら結果は、物語への没入が読後の心理的・社会的変化を促進する可能性を示しており、没頭を中心とした深い読書体験が、読後の思考・感情だけでなく、現実の行動選択や対人関係にも影響を及ぼすことを示している。

小説とマンガの比較では没入度・読後への影響ともに有意な差はみられず、媒体の違いだけでは読後の変化に大きく影響していない可能性がある。先行研究とは違い、回答者が自由に想起した作品を対象とし、内容やジャンルが多様となったため、本研究の結果の差異につながった可能性が考えられる。

年代別には、小学生～中学生期が多かった。これらは、自己形成や価値観の形成が進む児童期から思春期にかけての読書体験は、その後のアイデンティティ形成に長期的に関与しやすいと考えられる。影響を受けた作品は小説やマンガが中心で、読者にとって小説やマンガが物語体験の主要な媒体であり、感情移入や自己投影を通じた影響を受けやすいことを示唆している。内容別に整理した結果、内容ごとに影響の質が異なり、恋愛や青春ジャンルでは感情的共感、自己啓発や歴史、文学などでは知的好奇心や学問的興味、人生観の形成に寄与しているなど、物語の特性が読後の変化を方向づける重要な要因であることが示された。

恋愛関係における蛙化現象の関係性文脈の検討 ——心理的要因との関連を通して——

問題・目的

近年、恋愛関係において、好意を抱いていた相手から好意を返された際に、突如として嫌悪感や拒否感を抱く「蛙化現象」が注目されている。先行研究では、親密性への恐れや愛着スタイルといった個人内の心理的特性との関連が指摘されてきたが、蛙化がどのような相手や関係性の文脈において生じやすいのかについては、十分に検討されていない。本研究の目的は、蛙化現象を個人の心理的特性と相手との関係性の文脈の両側面から捉え、その発生要因を明らかにすることである。

方法

大学生 204 名を対象に Google フォームによる無記名回答のアンケート調査を実施し、有効回答 156 名を分析対象とした。調査では、蛙化体験尺度、親密性恐怖尺度、成人愛着スタイル尺度を用いて心理的特性を測定した。また、相手との上下関係や好意の生じるスピード・強さなど、関係性の文脈に関する項目を設定した。さらに、自由記述欄の回答について内容に基づく整理を行った。

結果・考察

分析の結果、親密性への恐れは蛙化体験と有意に関連しており、親密性への恐れが強い者ほど蛙化反応が生じやすいことが示された。蛙化体験を従属変数、親密性への恐れおよび愛着スタイルを独立変数とする重回帰分析の結果、親密性への恐れのみが有意な正の影響を示し、愛着スタイルの影響は認められなかった。一方、関係性の文脈に関しては、相手が対等または下位の立場である場合に蛙化が生じやすく、上位の立場にある場合には生じにくいことが明らかとなった。

また、蛙化の強度は、好意の生じるスピードや好意の強さと正の関連を示し、関係の急速な進展が蛙化反応の引き金となる可能性が示唆された。

自由記述の整理からは、親密性への不安、理想と現実のギャップ、自己理解といった特徴が見いだされた。

以上より、蛙化現象は、個人の心理的特性と関係性の文脈が相互に作用する中で生じる多面的な心理現象であることが示唆された。

放課後児童クラブの実態

—子どもたちの「遊び」に注目して—

問題・目的

放課後の子どもたちの居場所として放課後児童クラブが存在する。放課後児童クラブに関する先行研究はいくつかあるものの、心理学的研究は活動報告の類に比して少なく、遊びに焦点を当てた研究も十分とはいえない。そこで本研究では、放課後児童クラブに関して、子どもたちの「遊び」に焦点を当て、その実態を明らかにすることを目的とした。

方法

参与観察と質問紙調査の2種類の調査を行った。参与観察は、小学校の夏休み期間（2025年8月1日～8月31日）の内10日間（計65時間）、T児童センターでアルバイトとして勤務をしながら行った。対象はT児童センターを使用する小学1年生～中学1年生の児童（約100名）で、9つの観点を事前に設定した。質問紙調査は、T児童センターに勤務する専門スタッフ6名を対象にして行い、9つの質問に回答してもらった。

結果・考察

調査の結果、放課後児童クラブにおける「遊び」の特徴や、放課後児童クラブが果たす役割について明らかになった。放課後児童クラブにおける「遊び」には、「異学年の子と遊ぶことができる」「遊ぶ場所・機会を提供している」という2つの特徴があるといえる。異学年交流に関しては、遊びを通じて自分の立場や役割を認識するきっかけ作りとなる一方で、児童の間に上下関係ができすぎてしまう場合があるというデメリットも挙げられた。遊びの機会の提供に関しては、参与観察においてデジタルデトックスが叶った事例があったことから、放課後児童クラブはある意味で「アナログ的な遊び」を要求される空間であるといえる。また、限定的な空間であるため、仲の良い友達がいないと遊ぶことに消極的になってしまう児童もいる。それ以前に「遊びを見つけることが苦手な児童が多い」というスタッフの声もあった。これらの要素に関連して言えることは、現場スタッフの見守りや声かけが児童に大きな影響を与えるということであり、今回の調査によって現場スタッフの重要性が再認識された。

現代の少子高齢化・インターネット社会において、放課後児童クラブの存在は今後ますます重要になってくると考えられる。

過去にからかわれた経験と自尊感情との関連

問題と目的

からかいは、学校生活や友人関係の中でしばしばみられるコミュニケーションである。しかし、その受けとり方は一様ではなく、冗談として笑いながら受けとめられる場合もあれば、侮辱や排除として経験され、自尊感情の低下など、心理的負担につながることもある。

自尊感情は、自己をどれだけ肯定的に評価しているかに関わる感情の1つである。また近年、自尊感情を「平均水準」として捉えるだけでなく、日々どれくらい揺れやすいかという「自尊感情の変動性」という視点が注目されている。自尊感情が不安定である人ほど、対人出来事の影響を受けやすい可能性が指摘されている。

本研究は、自尊感情と、自尊感情の変動性の高低を組み合わせた4群を構成し、からかわれた経験との関連を検討することを目的とする。

方法

18~23歳の大学生146名（男性41名、女性101名、その他4名）を対象にGoogle Formsによる質問紙調査を実施した。(1) フェイスシート、(2) からかひの有無・頻度・時期、(3) からかひに対する認知的評価尺度（葉山, 2023）10項目、(4) 知覚された自尊感情の変動性尺度（小川, 2020）12項目、(5) 自尊感情尺度（Mimura & Griffiths, 2007）10項目、への回答を求めた。

結果・考察

からかわれた経験と自尊感情との関連は一部支持された。からかわれた有無に関して有意差はみられなかったものの、からかわれた頻度に関して、自尊感情が低く不安定な群が、自尊感情が高い群よりも有意に頻度を多く回答していた。また、からかひ評価尺度との関連では、脅威度の評価において自尊感情と、対処効力感の評価においては自尊感情と変動性の両方に、それぞれ関連がみられた。自尊感情得点は頻度やからかひ評価尺度の2因子など、からかわれた経験の諸側面と関連がみられたが、自尊感情の変動性について関連は限定的で、対処効力感において関連がみられた。これは、時によって自尊感情が揺れるという時間的な特性が影響していると考えられた。脅威度の評価は直観的な判断が求められるのに対し、対処効力感は、「自分はからかひに対処できるか」という縦断的な評価であるため、自尊感情の変動性との関連がみられたと考えられる。

今後の課題として、4群に分類したことによるサンプル数の少なさが挙げられる。1群あたり約30~50ほどのサンプル数になったため、外れ値が大きな影響を及ぼした可能性がある。また、からかわれた時期を複数選択にしたことで、自尊感情との関連を検討できなかった。研究の信頼性や検討できる幅を広げるためにもサンプル数を増やし、時期や期間などの縦断的な判断を用いられるものを取り入れていく必要があるだろう。

育児経験のある保育士の子ども観

問題・目的

これまでの研究で、育児の役割を担う「母親」と保育の役割を担う「保育士」の2つの役割を併せ持つ女性が、育児と仕事の両立に困難を抱えることや、厳しい労働環境により自身の子どもとの関わりに葛藤を抱えることが明らかにされてきた。しかし、職場でも家庭でも常に子どもと関わり続ける彼女たちが日々の葛藤や多様な経験を経て、具体的にどのような子ども観を獲得してきたのかを明らかにしている研究は少ない。本研究では、育児と保育という二重の役割を担う女性がどのようなプロセスを経て子ども観を獲得してきたのかを明らかにすることを目的としている。

方法

「公立保育園 Y 園」に依頼し、面接調査への快諾を得られた個人（保育士）3名への調査を実施した。データ収集は半構造化面接によって行い、得られたデータから逐語録を作成し、M-GTA (Modified-Granted Theory Approach) を用いて分析を行った。

結果・考察

分析の結果、24の概念が生成され、現在の子ども観が形成されるまでの段階が【子育ての序盤】【保育経験から得た気づき】【成長・発達から得た気づき】の3つに区分されることが明らかになった。【子育ての序盤】には、《子どもに対する固定観念》や子どもを《未熟な存在》と認識する様子が見られたが、保育経験や育児経験を通して様々な気づきを得ることによって子ども観が変容していく。職場や家庭で子どもと関わる多様な経験を通して、保育士自身も子どもに対して多様な考えを持つようになり、子どもに対するイメージが拡大していくことが分かった。子どもと関わる直接経験から、子どもが一人ひとり異なる存在であることを理解し、子どもごとの特性を認め、それを受け入れようとする姿勢が確立されることも確認された。また、保育経験から子どもが周囲の様々な要因の影響を受けやすい存在であるという考えが深まり、子どもが置かれている環境や家族の関わりに目を向けようとする意識が強く根付いていることが明らかになった。さらに、3名の保育士によってそれぞれ具体的なエピソードと共に子どもに対するイメージや観念が語られ、自身が辛い思いをしている時に寄り添ってくれた子どものエピソードから、優しさ・思いやりにあふれた存在であると語ったり、発表の場での子どもの振る舞いを見て、感動を与えてくれる存在であると語ったりしている。

日常的に子どもと関わる経験が保育士の子どもに対する観念形成に寄与していること、その時に抱いた感情や子どもに対して感じた思いが現在の子ども観の形成に繋がっていることが示唆された。

大学生の家族機能と学校適応感との関連

問題と目的

自立、アイデンティティの確立という発達課題を抱える大学生期において、家族との適切なかわりは、学校生活を適応的に過ごすために必要な要素の一つである。そこで本研究では、大学生を対象に、家族機能と学校適応感との関連を明らかにし、大学生の学校適応感を形成する要因のうち家族機能がかかわる点について知ることを目的とする。

方法

大学生計 226 名(男性 56 名, 女性 166 名, 性別無回答者 3 名, 平均年齢 19.73 歳)を対象に, Google フォームによる無記名の質問紙調査を実施した。調査項目として, フェイスシート 3 項目, Olson(1985)が作成した FACE III の邦訳版である家族機能測定尺度(立山, 2006)20 項目, および学校適応感尺度(山口・松寄, 2018)25 項目への回答を求めた。

結果と考察

相関分析の結果, 家族機能と学校適応感との間には負の相関がみられ, 「大学生の家族機能と学校適応感との間に正の相関がある」という仮説は支持されなかった。具体的には, 家族機能の「凝集性」「適応性」がともに「健康」「先生との関係」「社会」と負の相関を示し, 一方で「学習・進路」とは相関がみられなかった。この要因として, 家族との距離が自立やアイデンティティ確立を促し, 学校での, とくに対人関係の適応に前向きにはたらいことが考えられる。また, 「大学生の家族機能は, 学校適応感の先生との関係因子とは関連が弱い, または有意な関連は示されにくい」という仮説についても, 負の相関を示している点から, 支持されなかった。担当教員や研究室の存在が学級担任制と類似した効果を担い, 社会因子の対人関係に含まれたことが要因として考えられる。

一方, 重回帰分析の結果, 「大学生の家族機能のうち凝集性は, 学校適応感の社会因子と負の関連を示す」という仮説は支持された。大学生において家族の情緒的結びつきが強すぎる場合, かえって友人関係などの社会的側面での適応を妨げる可能性が示唆された。

本研究の結果は, 家族と一定の距離を保つことが, 大学生の学校での友人関係やコミュニケーションにポジティブにはたらくことを示唆するものであった。今後は家族機能不全の家庭をもつ学生や, 学校不適応に悩む学生の支援につなげる研究が期待される。

現実の自己評価と SNS 上の反動的自己評価とのズレが精神的健康へ及ぼす影響

—理想自己との関連—

問題・目的

近年、Instagramをはじめとする SNS は、若年層において主要な自己表現の場として定着しており、自己呈示や他者からの評価を通じて自己認識や精神的健康に影響を及ぼすことが指摘されている。SNS 上では理想化された自己像を提示しやすく、その結果、現実の自己評価と SNS 上の自己評価、あるいは反動的自己評価との間にズレが生じると考えられる。先行研究では、自己評価間の不一致が抑うつなどの精神的健康と関連する可能性が示されてきたが、匿名性の低い SNS である Instagram を対象とした検討は十分ではない。そこで本研究では、[現実・SNS 上] × [自己評価・反動的自己評価] で構成される 4 側面に着目し、相互間に生じるズレが抑うつ傾向に及ぼす影響を検討することを目的とした。併せて、理想自己の志向性が、自己評価間のズレと抑うつとの関係にどのように関与するかについても検討した。

方法

大学生 94 名を対象に無記名質問紙調査を実施した。抑うつ傾向および自己評価に関する尺度を用い、各自己評価（自己評価・反動的自己評価）間の差からズレ得点を算出した。

結果・考察

自己評価間のズレについて分析した結果、各ズレ得点には有意な差が認められ、特に現実の自己評価と SNS 上の反動的自己評価とのズレが最も大きかった。一方で、いずれのズレ得点についても抑うつ傾向との有意な関連は認められず、自己評価間のズレが大きいほど抑うつ傾向が高いとする仮説は支持されなかった。さらに、各自己評価得点と抑うつ傾向との関連を検討したところ、現実の自己評価のみが有意な負の関連を示し、重回帰分析結果においても抑うつ傾向を有意に予測する要因であった。SNS 上の自己評価や反動的自己評価は、抑うつ傾向に対して有意な影響を示さなかった。

これらの結果から、現実の自己評価と SNS 上の反動的自己評価とのズレが比較的大きいものの、そのズレ自体と抑うつ傾向との直接的な関連は確認されなかった。Instagram は匿名性が低く、閲覧者の多くが現実の友人・知人であるため、SNS 上の自己像が現実の自己の一側面として認識されやすく、自己評価間のズレが強い心理的負荷として経験されにくい可能性が考えられる。一方で、現実の自己評価が抑うつ傾向と強く関連していたことから、精神的健康においては、個人が現実の自己をどのように捉えているかが重要であることが示唆された。

大学生の傾聴経験が対人信頼感と安心感に及ぼす心理的効果の検討

問題・目的

近年、若者の間で自己肯定感や対人信頼感が十分に育ちにくいことが指摘され、日常的なコミュニケーションの質が心理的な安定や人間関係の形成にどのように関わるのかが重要な課題となっている。なかでも、相手が自分の話に注意深く耳を傾けてくれたと感じる経験は、安心感や信頼感を高める要因として期待される一方、話を受け止めてもらえなかった経験は、不安や否定的感情を伴いやすいと考えられる。ただ、傾聴の心理的効果に関する先行研究の多くは、医療やカウンセリングといった専門的援助場面を対象としており、大学生が日常生活の中で経験する「傾聴された／されなかった」出来事が、安心感や対人信頼感にどのような影響をもたらすのかを数量的に検討した研究は十分ではない。

そこで本研究では、大学生を対象に過去の傾聴経験および非傾聴経験を想起してもらい、それぞれの場面で感じた安心感・信頼感の違いを比較することを目的とした。また、自由記述を通して、各経験に伴う感情的・心理的反応の特徴を質的に把握し、傾聴的態度が大学生の対人関係においてどのように機能しているのかを明らかにすることを目指した。

方法

大学生を主な対象として Google Forms を用いた無記名のオンライン質問紙調査を実施した。回答者は 88 名であったが、そのうち大学生ではない 40 代以上の 8 名を除外し、最終的な分析対象は大学生 80 名（男性 44 名、女性 36 名）となった。調査では、参加者に過去の「話を聴いてもらった経験」と「聴いてもらえなかった経験」をそれぞれ想起してもらい、その際に感じた安心感と対人信頼感を 5 件法で評定させた。また、当時の相手の態度に関する選択式項目への回答を求め、さらに自由記述欄では、その出来事に伴う感情や心理的反応について記述を得た。

量的データについては、同一参加者内で 2 条件を比較するために対応のある t 検定を行い、自由記述は内容を整理し、意味的な類似性に基づいてカテゴリー化した。

結果・考察

分析の結果、話を聴いてもらった経験では、安心感と対人信頼感の評価がいずれも高く、聴いてもらえなかった経験では大きく低下していた。対応のある t 検定の結果、両指標において有意差がみられ、相手が受容的・共感的な態度で耳を傾けることが、話し手に心理的な安心感や信頼感をもたらすことが示された。

自由記述の分析においても、聴いてもらった経験では「安心」「感謝」「理解が深まった」といった肯定的な反応が多くみられた一方、聴いてもらえなかった経験では「不安」「悲しみ」「否定された感覚」など、否定的な感情が中心であった。さらに、否定的経験では、相手の態度への失望や心理的負担を示す内容が多く見られ、傾聴の欠如が情緒の不安定さや関係性の揺らぎにつながる可能性が示唆された。

以上の結果から、日常的なコミュニケーションにおいて、相手が真摯に話を聴く姿勢を示すことは、安心感や信頼感といった心理的基盤を支える重要な要素であり、対人関係の質を向上させるうえで大きな役割を果たすことが明らかになった。

大学生の玩具購買行動とノスタルジアの関係 —キダルトと特性ノスタルジアに着目して—

問題・目的

近年、玩具業界では大人による購買行動(本研究ではキダルト行動とする)が指摘されており、子どもだけでなく成人層をも明確なターゲットとして想定した商品展開やマーケティングが進められるようになってきている。本研究は、特に「ノスタルジー」およびその性格特性である「特性ノスタルジア」が、大学生のキダルト行動にどのように関与するかを明らかにすることを目的とする。

研究方法

調査対象は、大学生 118 名 (男性 19 名・女性 99 名) であった。対象者には、筆者が大学生 3 人に対して行ったディスカッションと KJ 法から作成した 5 カテゴリー (ノスタルジー動機・現実逃避動機・社会的つながり動機・自己満足動機・承認欲求動機) からなる「玩具購買動機」尺度を用いた質問紙を配布し、さらに特性ノスタルジアの傾向を長峯・外山 (2019) 開発の日本語版 Southampton Nostalgia Scale (J-SNS) で測定した。また、玩具購買頻度・鑑賞頻度・支出割合など複数の指標を標準化して得点化することにより、キダルト行動得点を算出した。これを従属変数とし、玩具購買動機の 5 下位尺度得点および特性ノスタルジア得点を独立変数とする重回帰分析および単回帰分析を実施した。

結果と考察

分析の結果、重回帰モデル全体は有意であり ($R^2=.152, p<.01$)、標準偏回帰係数を見ると現実逃避動機 ($\beta=.192, p<.05$) および自己満足動機 ($\beta=.213, p<.05$) のみが玩具購買行動得点と有意な正の関連を示した。一方、ノスタルジー動機や社会的つながり動機、承認欲求動機は有意ではなかった。また、特性ノスタルジア得点について単回帰分析を行ったが、 $R^2=.003$ でモデルは有意でなく、標準偏回帰係数 ($\beta=.057$) も有意水準に達しなかった。つまり、ノスタルジー動機や特性ノスタルジアは、購買行動の強さと有意に関連していないことが示された。以上より、玩具購買行動を促す要因はノスタルジー的回帰というよりも、日常的な情動調整や自己表現欲求にかかわる内的・具体的な心理動機による可能性が示唆された。

本研究はサンプル数が限定的であり、男女比にも偏りがみられることから、結果を一般化して解釈するには慎重さが求められる。今後は、調査対象の人数を増やすとともに、性別や年齢層の構成をより均等にした調査を行うことで、キダルト行動と各購買動機との関連性をより精緻に検討する必要があるだろう。これらの課題を踏まえた継続的な検討によって、成人期における玩具消費行動の心理的背景が、より多角的に明らかにされることが期待される。

大学生の育児観とそれに関連する要因 ～父親的・母親的育児という視点から～

問題と目的

近年、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」といった伝統的な性別役割観は揺らぎを見せ、男女共同の育児参加が求められるようになってきている。しかし一方で、高齢者層を中心に依然として伝統的性別役割観を支持する層が存在することや、現実問題、仕事と家庭の両立が困難であるという社会的要因から、性別役割分業が維持されている側面もある。このような現状を踏まえ、今後育児の担い手となる大学生がどのような育児観をもっているのかを明らかにすることは重要である。そこで、本研究では、大学生を対象に、父親的育児および母親的育児という視点から育児観を捉え、性別・性別特性・子どもに対する感情が育児観に与える影響について検討することを目的とする。

仮説1 男性は父親的育児を志向し、女性は母親的育児を志向する。

仮説2 男性性の高い者は父親的育児を志向し、女性性の高い者は母親的育児を志向する。

仮説3 子どもに肯定的な感情を持つ者は母親的育児を志向し、否定的な感情を持つ者は父親的育児を志向する。

方法

大学生 153 名（男性 53 名・女性 100 名）を対象に、Google フォームを用いた無記名式質問紙調査を実施した。質問紙は、フェイスシート、育児観尺度 18 項目、性別特性尺度 20 項目、子どもに対する感情尺度 28 項目から構成された。得られたデータを基に、性別、性別特性、子どもに対する感情が育児観に及ぼす影響について統計的分析を行った。

結果・考察

分析の結果、まず母親的育児については、女性であること、女性性が高いこと、子どもに肯定的な感情を有していることと関連することが示された。このことから、母親的育児志向は生物学的性のみならず、個人の心理的特性によっても形成される可能性が示唆された。一方、父親的育児については、男性性が高いこととのみ関連が認められ、他の要因との関連は見られなかった。このことは、父親的育児項目が抽象的であることや、特定の性別役割と結びつかない、中性的な性質をもつ概念であったことが影響していると考えられる。

これらの分析結果は、大学生の育児観に一定程度、心理的特性が影響していることを示唆するものの、実際の育児場面においては、職場環境・夫婦関係・社会制度等、さらなる複数の要因が影響することが考えられるため、今後は、より多様な要因を含めた検討や、実際に育児を行っている者に対する調査研究が求められる。